

「幼児教育の源流」 V

コメニウスの幼児教育思想



井谷 善則

はじめに

コメニウスの代表的著作のひとつ『大教授学』第七章に次のような言葉がある。

「人間の場合、ゆるぎないもの、消え去らぬものは、人生の最初の時期に吸い込んだものだけです。このことは、似かよった例を見ればわかります。陶器が新しいうちに吸い込んだにおいは、こわれるまで残ります。樹木は、柔らかな若木のうちにこずえを上下左右にひろげたそのままの姿をきり倒される日があるまで、何百年も持ち続けるのです。毛織物が初めに吸い込んだ染色はとけがたく染めかえはききません。曲げてから堅くなった輪たがをまっすぐに戻そうとすれば、たちどころに幾干の破片に砕けてしまいます。同じように、人間の場合でも最初

に刻みつけられたものが、完全に定着するのですし、これを考えることは奇跡に近いのです。したがって、人生の最初の時期からすぐ始めて、本当の知恵の道を刻みつけてやるがこの上もなく望ましいのであります」(3—1、91)この幼児教育の考え方は、コメニウス教育思想全体の一角を表わしたものにすぎないが、幼児教育の意義とその重要性の主張の一面をみることもができる。コメニウスにおける「子ども」の発見が近代教育思想の一大発展の契機となるわけであるが、本稿においてはコメニウスの幼児教育思想と、それをとりまく彼の教育思想の基本的考えをも一べつしたい。

そのために本稿では、第一にすべての子どもにすべての事柄をすべての面にわたって教育するという汎教育思想を、第二にその中で特にすべての子どもにも焦点を当てた万人教育思想を、

第三に『母親学校指針』を中心とする彼の幼児教育思想大系を、第四に『最新言語教授法』を中心とする彼の幼児教授原則論を一べつしてみよう。

I 汎教育思想

まず汎教育 (Pampaedia) 思想の正しい理解のために全く決定的な意味を持つものとして、接頭語の汎 (Pan-) の意味を明らかにする必要がある。そこで K. Schaller の所論を基にして論をすすめてみよう。(22)

1、汎は、それと一緒に並べられている名詞の意味を強める。またそれに添えられた名詞の究極さや完全性を指示する。

2、汎は、すべての人間の知識および行為の基礎になっている、实在(性)がひとつの無秩序化した積み重ねのかたまりではなくて、ひとつの全体であるということを想起させる。

3、汎は、人間の知識や事象のすべては、すべての事柄の根源において、神の内にその目標や目的を持ってしているとわれわれに教える。

4、汎は、汎教育の道が意のままに発見されるのではなくて、全体それ自身の中からさぐり取り、発見されるのであるということを示す。

以上四つのすべての規定において、われわれがそれらをひと

つの共通の見解に還元しようと試みるなら、汎は、われわれに次のような意味を指示する。すなわち、第一に、すべての被造物は調和的に組織化され統一化されており、各々の部分は、単独にそれ自体に割り当てられた位置を持っている。

第二に、すべての被造物はすべての部分において密接な関連によって有効に浸透し合っているひとつの全体である。

第三に、すべてのものはひとつのものから出て、そしてそのひとつのもの、すなわち神へ通ずる。そしてそのひとつのものの内においてまずすべては一となり全体となる、ということの意味していると考えられる。

他方、汎の包括的な意味は、全七巻『人事改善に関する大會議』の中の第四巻『汎教育』の第四章からも明らかにされる。汎の解明はコメニウス教育思想の三つの言葉すなわち、すべての者に、すべての事柄を、すべての面にわたって、の中に表明されている。この三つの視点に関してコメニウスは次のように述べている。

「われわれは人類の改善に必要な不可欠な知識から出発して、次のことを明らかにしよう。

I すべての人間、すべての個人を完成すること。そのためわれわれは教育の場所として学校を必要とする。その学校は全体との割合にしたがって正しい位置にすえられ、そしてす

べての人の完成が果たされる所である。これに対して汎学校という表示を用いる。

Ⅱ すべてのものを通してのみ、人間を人間たらしめうる。そのため、すべてが活動するようになる手段が必要である。そこですべてのものを含んでいる教科書を考える。これに対して汎教科書という表示を用いる。

Ⅲ 人間は根本的には、教える存在である。だからわれわれは教師を、常にすべてのものの見識を持ち、すべての人にすべてのものを彼の素地にしながらって説明することを理解している者と、みなす。これに対して汎教師という表示を用いる」(23—49)

これらのことを考慮に入れながら、コメニウスは『汎教育』(Pampaedia)の中で汎教育の定義を次のように試みている。「すなわち汎教育とは全人類の個々個別的なすべての者に適用される教育であり、それはその規範において全体に適合しており、それは人間を人間の本質の完成へ導くものである。

ギリシヤにあつては、Palaia は教導および訓練(Institutio, disciplina)を意味していた。そこにおいては、Palaia によって人間は野蛮な不完全な状態から導き出される。そして汎は全体との関連のみを意味する。かくて汎教育において、すべての者にすべてのものをすべての面にわたって教えられると

いうことになる」(23—5)

次にこの汎教育思想の内容についてふれておきたい。この際、現在西ドイツコメニウス学(Cornenologie)の世界的権威である Klaus Schaller (22)の著作を参照したい。

最初に、人間の機能は、コメニウスによつては一つの鏡の反射能力に類比された。鏡はそれが貯蔵するより、反射することに重点がある場合、鏡は鏡の本質をみたまふことができる。同様に、人間の本質は、自分自身の中からみたまふのではなくて、この世や、神との向かい合わせによつてみたまふものだと考へるのである。

だからこそ、人間は神および世界の客体であり、人がこの状態にすえられた時にのみ、人は神の反映であり、同時に世界の反映となり得る。この意味において、人間が人間に決められた状態の上にとどまっている限り、人間は自分の鏡の本質に従つて世界自身を把握する。この立場の上にこそ、大宇宙に対する小宇宙が人間であり神の似姿である。

一方また、鏡は自らのためには、吸収したものを何ひとつ保持しようとしなない。それどころか反射する。そして知識こそが「利用」されるのである。「利用」を通して、人間は秩序の中にいるかどうか、人間は正しい状態にあるかどうかが表示される。加えて「利用」は被造物を支配する人間の本来の任務でもある。

それゆえに「利用」自身をコメニウスは科学、宗教、政治の三つに分け、これら三つが人間の最高の任務であり、その他のものはすべて副次的任務とする。

かくて「利用」、すなわち万物を神に向けること、換言すれば、万物をその固有の目的に従って利用するということは、人間の課題であるということになる。この「利用」においては、人間の幸福のみでなく、全体の幸福、神、世界そして人間の幸福に努力しなくてはいけない。「利用」は人間に任された世界創造の最後の所業であり、それはその構造において、新プラント主義が *Epistrophe* と呼ぶものに一致している。かくてすべてのものは人間へ差向けられ、神は人間を必要とする。

確かに「利用」のこれら三つの任務の根源は人間の内にある。だから人はただこの任務を遂行するだけである。科学、政治、宗教への種はすでに持っている。だからこそ、祖先の墮落によって全体の中でのその位置を失った人間を再び、回復し、再び正しい位置にすえ、その上で実を実らせることは十分可能である。

そこで汎教育によって、陶冶可能ではあるがいまだ非人間的なるものが、教導や訓練によって理性的人間となる。そして汎教育において人間に起こる人間化は、それ自身において三つの装いとして現われる。すなわち知恵、徳、敬神となる。

かくて今や、汎教育とは、人間の回復のことであり、人間をすべてのものの真の知識の中へ導くことであることが明らかとなった。また、汎教育は、人間だけのための計画ではなくて、神こそが汎教育の思想における最初であり究極のものと理解されるのである。

II すべての子どもの教育を

周知のごとく、コメニウスは、すべての子どもは、農民や日雇人夫の子どもでさえ、区別なしに学校へ行かなくてはならないということ、さまざま言い方で、さまざま書の中で語っている。

たとえば、『大教授学』第九章の冒頭において彼は次のように言っている。「金持ちの子弟や身分の高い者の子弟ばかりでなく、すべての子弟が同等に、つまり貴族の子どもも身分の低い者の子どもも、金持ちの子どもも貧乏な子どもも、男の子も女の子も、あらゆる都市、町、村、農家から、学校へあがらなければならぬ」(3198)と、ここで概括的にすべての子どもの教育の問題を述べている。

本節では特にこの中で富者の子どもと貧者の子どもの教育に差異の生じてはならないという彼の力説に焦点をあてて話をすすめよう。ロバート・アルトもいうごとく、「コメニウスは貧

しき人びとと压制下にあえぐ人びとの党派とに加勢したということである。またさらに、すべての人びとが繁栄と幸福の中で生活できる権利のために加勢をしたということである。すでに、フルネックの牧師時代に彼は自分の教団に属する多数の貧者の面倒をみてきた。そしてそれに基づいて彼は『天にいます神にたいする抑圧された貧者の嘆き』という書を公刊した。その第一の書かんで、コメニウスは貧者をしてキリストにその恐ろしい状態についての悩みを訴えさせている」(28―22)

すなわちコメニウスは次のようにいつている。「彼ら(富者)がみち足り、現世のありとあらゆるものを所有していることは確かに正当ではないと思われる。私たちはそのことを嘆き悲しむ。なぜならばわれわれもまた富者と同じく神の造り給いしものであるから。富者の多くは充滿した穀倉と食物貯蔵庫とをもち、それらの貯えはねずみたちに食い荒らされるのである。これにたいし、われわれは飢餓で死にゆくであろう。彼らは毛皮やマントや上衣やたくさんの衣裳で一杯になっている戸棚をもっている。それらの衣裳には、しみがつくことであろう。それにたいしわれわれは身体のはみ出たボロをまとって徘徊するのである」(15―23・24)

かくのごとく、コメニウスは同じ人間に富む者と貧しい者とが存在する不平等を不当として嘆くばかりでなく、貧しい者が

昼夜働いても、それは貧しい者のふところにははいらず、富む者のふところにはいり、こうして富む者が貧しい者の手や口からパンをひたたくてゆくのをいきどおっているということは明らかである。

このように考えるコメニウスにあってこそ、ジャン・ピアジエが主張するように、「富者や貴族または官職についている人びとの子どもだけが、おなじような境遇を占めるために生まれてきたのではなく、学校の門はそれらの子どもだけに開かれていて他の者たちは何の期待ももてない者としておしのけられるというわけのものではない。精神は欲するところで欲するとき息を吹く」(29―25)と考えた。その結果マンフォードも指摘するように、「コメニウスは教育を貧者もはいるほど安い費用にしようと努力して、時間の巧妙なあんばいによって節約をはかろうとした。イギリスのベルやランカスターよりずっと以前に、コメニウスは費用節減の手段として助教制度を創案したりした」(30―257)

だがしかし、一教師が五、六百人の生徒をいちどに教えることは可能であるばかりでなく、必要不可欠でもあるとコメニウスが主張する時、この見解に対してマンフォードは次のように評している。「すべての子どもたちのための万人教育という、ヒューマニスティックな教育目標は、その目標を無効にするような

機械的教育学と結びついていた」(30—258)といつて、コメニウスのヒューマニストとしての性格をまっ殺しようとしている。しかしそうばかりはいえない。彼のすべての子どもへ教育を、という要請から教育における生産力視点という発想が生まれた。これをもとにして近代の学校が構築され、現代にその精神がひきつがれているのである。

III 幼児教育思想

次にコメニウスの幼児教育思想を一べつしてみよう。まず『汎教育』(23)にみられる彼の学校論の中で母親学校⇨幼児の学校の位置をみよう。この書によるとまず、

A、現世への準備としての胎内の教育に関して、1 胎内の学校、

B、来世への準備としての現世の教育に関して、2 幼児の学校⇨母親学校(母親の膝、出生〜六歳)、3 少年期の学校(七歳〜十二歳)⇨国民母国語学校、4 若年期の学校(十三歳〜十八歳)⇨ラテン語学校、5 青年期の学校(十九歳〜二十四歳)⇨大学と外国旅行、6 壮年期の学校、7 老年期の学校

C、神との永遠的交わりとしての来世での教育に関して、8 死の学校をそれぞれ組織的体系的に論じている。以上のごとく

『汎教育』においてコメニウスは一生を通じて、すべてを教育の相の下にとらえようとするが、その中でもとりわけ幼児教育に非常なウエイトをおいている。彼は、人類のすべての混乱の唯一の源泉は子どもの養育における軽率さであると考え、ひたすら子どもの教育のあり方を考えていたのである。だからこそ、「彼は子どもの後のあらゆる形成の萌芽でもあり前提でもある意味的、規則的な就学前教育の必要性を明らかにし、同時に広く、かかる就学前教育の内容や方法までも取扱ったのである」(28—58)

そこで本節では『母親学校指針』を中心にコメニウスの幼児教育思想を明らかにしたい。まずこの書の成り立ちをみよう。

『母親学校指針』は、コメニウスが一六二七年に追放にあって故郷ホヘミアからポーランドのリサへ追われた後に、最初に書かれた書で、まさに逃亡後の第一弾である。彼自身この書はまちこがれた待望の故郷への帰還の際に役立てようと思っていたものである。草稿は一八五一年リサで Anton Gindely により発見されて以来プラハ国立図書館にある。その成立、作成年については、J. A. Novak の一六三〇〜六年説、F. M. Bartos' の一六三〇年説、J. Henrich の一六二九〜三二年説、J. Brauhora の一六三三年説がある。広島大学資料室には一六五七年版 Opera Didactica Omnia の第一巻に掲載されたものの複製

版が所蔵されている。そしてこの書のドイツ語訳は、知り得る範囲内において十八種本ある。

ではまず『母親学校指針』の特色を浮きぼりにするために、『教授学』、『大教授学』との関連比較を試みてみよう。『大教授学』の底本である『教授学』は、亡命者集団の避難所であるリサで、おそらく一六三〇年に書き上げられたのであるが、その『教授学』において計画されたその三十の章の概観を『母親学校指針』の「読者へのあいさつ」において簡単に説明した後次のように述べている。「以上が『教授学』の内容である。しかし『教授学』に対応するにふさわしい教科書が作成され、公にされるまでは『教授学』の方法を行なうことは不可能である。だから私は今まさに、この『母親学校指針』を公にする」(24-16)とコメニウス自身が述べている。このことからして『教授学』、『大教授学』が一般に教授原理を述べているのに反し、この『母親学校指針』はそれら原理を実際に応用する場合の手引書あるいは方法上の指導書としての性格をおびたものとみることができよう。かくてこの書の構成をみると次のようである。1 児童観、2 幼児教育の目的、3 幼児教育の必要性、4 幼児教育内容論、5 健康教育論、6 悟性教育論、7 労作教育論、8 雄弁教育論、9 徳性教育論、10 敬神教育論、11 母親学校の期間、12 上級学校への準備、等であ

る。

そこでこれから、この書における彼の児童観の考察へ進もう。「コメニウスにあっては、児童神聖観はキリスト教思想に矛盾しないのみでなく、むしろ聖書によって確認された見解である」(2-67-6、-80)といわれるごとく、この書においてコメニウスは、「子どもは神からのもっとも貴重な賜物であり、もっとも価値ある宝物である」(24-17)ことを強調する。また、「子どもたちは神の子孫なのである」(使徒行伝)「見よ、子どもたちは神から賜わった嗣業であり、胎の実は報いの賜物である」(詩篇)等々の言葉をしきりに引用する。そしてそういう聖書の考えに基づいた児童観を、彼は銀や金とのアナロジーにより、次のように要約している。

「1 銀や金は死せる物質であるが、子どもは生ける神の生ける像である。2 銀や金は神の口先だけで創られたが、子どもは神自らが神の指で創られたもつた。3 銀や金はうつろうものであるが、子どもは永遠なる後継者である。4 銀や金は土地の中から現われるが、子どもはわれわれの身体、本体から生まれる。5 銀や金はある者から他の者へと交換され、だれの所有物でもなくみんなの共通財であるが、子どもは神から両親へ与えられた特別の財でありだれもその子を奪うことはできない。6 銀や金はどう欲やうぬぼれや虚栄心へ導くが、子ど

もが家の内にいると神聖な天使の保護を確信できる。7 銀や金はわれわれに何の指導ももたらさないが、子どもはわれわれにとつて謙虚、温順、親切、穩便の鏡となる」(24-19・21)

かくしてコメニウスはこのような児童観を基にして幼児教育の必要性と可能性を論じている。人間は知識、徳性、敬神の良き種子および深い根を本来自らの内に持っている。しかしその種子は放任しておいたのでは良く実らない。だから人間が正しく人間となるためには人間は教育されなくてはならない。しかも、教育は若い時代にするのがもっとも好ましい。なぜならば、幼児はロウのようにすべてに対して柔軟であるから、と語っているのである。だからこそコメニウスは子どもの陶冶は早くから始められなくてはならないことを強調して、うむことがないのである。

そこで次にいよいよ彼の幼児教育思想の内味を『母親学校指針』を中心に整理してみよう。(次ページ参照)

かく構造化されるコメニウスの幼児教育思想は、一見幼児には過大な負担のように見える。しかし、なによりも大切なことは、しなければいけないという自覚を持たせなければならぬことを、じかに習慣によっておぼえさせることが必要であるという。しなければならぬことを実際にしておぼえたあととなら、すぐ続いてくるものも楽に注ぎ込むことができるし、なにをす

るのか、なぜするのか、どうすれば正しくできるのかのみ込みやすいというのである。

IV 幼児教授原則論

前節までのコメニウスの教育思想・幼児教育思想をもとに、それでは実践のためにいかなる幼児教授原則をうちたてたのであろうか。そこで本節はコメニウスの幼児教授学思想を一見することを課題とする。その意味では、『教授学』、『大教授学』からのアプローチも可能であるが、あえて、『最新言語教授法』からのアプローチを試みたい。しかしこの書の全体を要約することもあまり意味がないので、まずその教授原則の紹介をした。以下の原則は、『最新言語教授法』の特にその第十章を中心とするいわゆる『分析的教授学』(26)とよばれるものの教授原則である。

〔一般原則〕

- 1 理念あるいは原像なしには何もかも認識しえない。
- 2 原像を模写することなしに知ることはできない。
- 3 この模写を可能にする道具または能力なしには何も知ることはできない。
- 4 既に知っている事柄は学習する必要はない。
- 5 未知の事柄は既知の事柄を介してのみ学ばれる。

コメニウス幼児教育思想の構造

<p>子どもが地上へ送られ</p>	<p>自分自身に仕える 〃 (自分に対して知識) そのために自分自身の認識 〃 自分自身およびその周りのすべてのものを知ること</p>	<p>被造物に仕える 〃 (被造物に対して徳) そのために諸事物の認識 〃 諸被造物の中に正しく自分を位置づけること</p>	<p>神に仕える 〃 (神に対して敬神) そのために神の認識 〃 まさに現世において神と交わること</p>
<p>神知学 三書 〃 汎</p>	<p>精神の書 〃 われわれのうちにある悟性の真理を伴った精神</p>	<p>自然の書 〃 われわれをとりまく神の被造物を伴った世界</p>	<p>聖なる書 〃 われわれの以前からある言葉をもっとしるされた聖書の啓示</p>
<p>教育目的</p>	<p>理性的被造物とすること</p>	<p>被造物の支配者たる被造物とすること</p>	<p>創造主の似姿でありよるこびである被造物とすること</p>
<p>教育内容</p>	<p>学 識 I 認識 ①自然科学 ②光学 ③天文学 ④地理学 ⑤歴史 ⑥家政学 ⑦政治学 II 行為 ①弁証法 ②算術 ③幾何学 ④音楽 III 会話 ①文法 ②修辞学 ③詩学</p>	<p>徳性または尊敬に値する徳行 ①節制 ②浄化 ③年長者への敬 ④恭順 ⑤真実を語ること ⑥正義 ⑦愛と善行 ⑧仕事 ⑨沈黙 ⑩忍耐 ⑪奉仕 ⑫礼儀正しき ⑬真面目さ</p>	<p>敬虔または敬神 ①われわれの魂がいつでもどこでも神を顧み、われわれのすべての動作の中に神をさがすということ ②われわれの魂が神の足跡にいつも気をつけいつでも神を畏敬と愛と恭順とをもって尊敬すること ③われわれの魂が間断なくかの神のことを考えて、魂と神が結合する時に、その中に安寧と歓喜と慰安とを、感じること</p>
<p>教育方法 〃 平易迅速徹底的確愉快</p>	<p>魂の窓である感覚 魂の鏡である思考 魂の望遠鏡である知識 を道具として 魂の内的眼である悟性 魂の内的手である意志 魂の内的力である行為 を神によって生み出された順序によって陶冶する</p>	<p>①すべての徳性ならびに良き道徳性の確乎とした手本を用いる ②時を得た、そして慎重な指導 ③親、学校、誠実な教師立派な教科書、討論などによる中庸の紀律</p>	<p>①思索 ②いのり ③試練</p>

- 6 学習によってのみ未知の事柄を学ぶ。
- 7 学習者は誤って学習しないように常に警戒しなければならない。
- 8 慎重に学習しても初めのうちは誤らないで学ぶことはできない。
- 9 学習者は一步一步漸進的にしか進むことはできない。
- 10 それゆえ、学習者は彼を指導し戒め改めさせる人が必要とする。
- 11 だれも教えなければ何ごととも教えられない。
- 12 だれも学習しなければ、なにも学習されない。
- 13 教授のないところでは知識の伝達は行なわれない。
- 14 教授者と学習者は相互に関連している。また教授過程はそのいづれも欠くことはできない。
- 15 教授者と学習者を結ぶひもは前者から後者に伝達される教授である。
- 16 よい教授者とよい学習者とよい教授によって学識は豊かになってゆく。
- 17 教授者は教えるだけの十分の能力を持っていないといけない。
- 18 教授者は教え方において上手でなくてはいけない。
- 19 教授者は教えることに熱心でなくてはならない。
- 20 学習不能の者には教えることはできない。
- 21 それを教えるのに十分なほど成熟していない者にはほとんど教えることはできない。
- 22 学習意欲を持たない者は教える前に彼に学習意欲をよび起こさないかぎり教えてもむだである。
- 23 資質があること、判断力があること、勤勉であること、この三つによって学習は非常によく進歩する。
- 24 資質や判断力の多少の欠如は勤勉によって補うことができる。
- 25 資質も判断力も勤勉もない場合には、教授や学習は全くむだに終わるかあるいはきわめて無効となる。
- 26 なにも教えなければなにも学ばれない。
- 27 混乱した教え方をすれば混乱した学習が生ずる。
- 28 なまけた教え方をすればなまけた学習が行なわれる。
- 29 学習の用意のできていない者には教えるはならない。
- 30 学習の用意のできていない者には教えることを延ばしてはならない。
- 31 教えようとする教材のよさを学習者によくのみこませたうえでなければ教えるはならない。
- 32 子どもに学習への興味を喚起させてから後でなければ教えるはならない。

- 33 子どもの方に自発的学習活動への構えができる前に教へてはならない。
- 34 活動の主体は学習者であり教授者は指導者である。
- 35 模倣すべき模範がないなら模倣はできない。
- 36 模倣のための教示がなされなければ、模倣はむずかしい。
- 37 模倣活動が行なわれなければ、模倣への教示も模範そのものの存在も無意味である。
- 38 範例を提示し、説明しそして模倣してみせるのは教授者の仕事であり、それを見て理解して模倣するのは学習者の仕事である。
- 39 範例と説明と練習なしには何もものも教えられない。あるいは少なくとも正しくは教えられない。
- 40 すべては範例・説明・および練習によって教えられ学ばれる。
- 41 常に範例が先行し説明がそれに続く。
- 42 行動によって生まれるべきことは、行動によって示さねばならない。
- 43 法則の長所は簡潔な言葉で明瞭に意味を示し真理を十分に含んでいることにある。
- 44 法則は模倣活動の間に示した方が、それと分離して別を与えるよりも有効である。
- 45 教授者と学習者は常にお互いに注意しあっていないといけない。
- 46 教授者は一般に先行し学習者は一般にそれに追従すべきである。
- 47 教授者は学習者があやまりをおかすたびに、その誤りに気づかせ、慎重に歩むように注意すべきである。
- 48 教えられるものの中には、常に関連がなくてはいけない。
- 49 先行教材は十分に習得された後でなければ放棄してはならない。
- 50 後続教材を教える時には先行教材を復習させるべきである。
- 51 訓練なしにはなにもものも学習されないかあるいはなにもものも正しくは学習されない。
- 52 訓練は中断なく常に、またいつも遊び半分でなく真剣に行なわれなければならない。
- 53 訓練は力づくであってはならない。
- 54 訓練は段階的でなくてはいけない。
- 55 悪いものはいいものよりも学習されやすい。
- 56 学習することは学び直すことよりも容易である。
- 57 教え直すよりも教える方が容易である。
- 58 生徒が学び直さなければならぬものを教えてはならない。

- い。
- 59 誤りあることを教えたら、できるだけ早く元に戻すように教えなくてはいけない。
- 60 悪いことを学ばせないように、またよいことを悪い学び方で学ばせないようにしなければならぬ。
- 61 やさしいことは学びやすく、むずかしいことは学び難い。
- 62 学習しなければならぬ事柄の中にはやさしいものとむずかしいものがある。
- 63 それゆえに、常に易より難へ進まなくてはいけない。
- 64 常に少ないもの、短いもの、単純なもの、普通のもの、近いもの、規則的なものから始めて、次第に多いもの、長いもの、複雑なもの、特殊のもの、遠いもの、不規則のものへ進むべきである。
- 65 少ないものを多いものよりも先に。
- 66 短いものを長いものよりも先に。
- 67 単純なものを複雑なものよりも先に。
- 68 普通のもの特殊のものよりも先に。
- 69 近いものを遠いものよりも先に。
- 70 規則的なものを不規則のものよりも先に。
- 71 一つの教授過程で教え、学ぶうるものは分けてはいけない。

- 72 複雑なものは一つ一つ学ばなければならない。そしてまず初めには主要なものを次いで副次的なものを。
- 73 長い時間にわたるものは時期を区分して一時期ずつかたづけなくてはいけない。
- 74 複合的なものは単純な部分に分け、この単純な部分を先に。
- 75 一般的説明は最初に、高度に特定化された説明は知識の完成である。
- 76 遠いものはそこに至る段階が求められなくてはいけない。
- 77 不規則なものは規則的なものへ帰すべきである。
- 78 知る対象となる事柄がまず理解されなくてはいけない。
- 79 決断の対象となるものは、理解と選択を必要とする。
- 80 なさねばならぬ事柄は理解と選択と行動とを必要とする。
- 〔各論Ⅰ知識を教える方法〕
- 省略
- 〔各論Ⅱ〕
- 迅速に、愉快にそして徹底的に教える方法に関する覚え書き
- 158 迅速さは適確な実例に、愉快さは明確な説明に、徹底さは頻々たる実践に、よってうまく達成される。
- 159 標的に対してまっすぐであり、すべてのわき道は避けなくてはならない。

- 160 あることを達成するためにわずかの手段で十分である時には、それ以上の手段は必要ではない。
- 161 すべての諸手段は、用意済みであり、手近になくなくてはならない。
- 162 常に漸進的に、決して飛躍やはずみなく。
- 163 常に関係ある事柄は一緒に扱え。
- 164 とぎれぬ不断の前進が著るしい前進となる。
- 165 方法の単調さが学習の迅速さに資する。
- 166 嫌悪に対する防御に全力を。
- 167 自分の資質を十分に伸ばすことが快い前進の基礎である。
- 168 教師は父らしくあらねばならぬ。
- 169 あらゆる研究過程を可能な限り、簡単に、うまく組織しよう。
- 171 学習されるべきあらゆる事柄は、個々人の実践を通して行ないなさい。
- 172 学習されるあらゆるものは、使用のためであらねばならない。
- 173 教えられるものはすべて多様性を欲受されうるように調整されなくてはならない。
- 174 幾人もからなる集団的なはり合いが必要である。
- 175 充実した教授が要求されるところでは、真実性や有用性

- が論証できないささいな問題ははねのけなくてはならない。
- 176 あらゆることは心からの楽しさとともに。
- 177 教授の道具は実例、説明、実践である。
- 178 一般に最初のもものが進んだ過程に従って、すべての後続人はそのように進む。
- 179 最初はすべてゆっくりとしかも正確であれ。
- 180 もしも最初の敷置がしっかりと確立していないならば、新しいものは何もそれらの上に構築できない。
- 181 すべてのものは端から端へ。
- 182 すべてのものを核心へ。
- 183 すべてのものを不断に多様に、自分自身の諸感覚を通して。
- 184 すべての事柄は子どもを不断の実践を通して。
- 185 不断の实地調査と实地検査を。
- 186 すべての子どもは教師のごとく行為する習慣を獲得すべきである。
- [以下省略]
- 以上で『最新言語教授法』における若干の幼児教授諸原則をみた。種々の注目に値する教授原則がここにみられる。たとえば、教授三段階説や学習三段階説もそのひとつである。前者に関しては、分析・分解、総合・合成、比較・類比という認識論

から出発した三段階の教授過程を構想している。後者に関して
は、教材の合理的伝達のための最高の原理および光、核心およ
び周辺、根本および尖端は、人はすべてのものを範例、説明お
よび模倣によって学ぶということであると彼は明言している。

そして範例・実例、説明・指示、模倣・実行という学習過程の
三段階説をあげている。コメニウスは、分析、総合、比較をも
って、認識の方法と考え、それをそのまま範例、説明、模倣と
いう教授の学習過程とすべきことを指示している。個々の教授
原則についての注釈は省くが、ここに幼児教育の原型をみるこ
とができる。

むすび

コメニウスは母国復興の時点に最良の贈りものとなるべき教
育学を構築しようとした。その中でとりわけ幼児の教育に重点
をおいた。 *auberweilich* (内面的) な問題の行きづまりに、
一度は落胆しながらも、あらためて幼児の教育という *inner-
weilich* (外面的) な問題に開眼することにより新しい幼児教
育学を発想した。その思想は決して第十七世紀の所産としてほ
うむりさるべきではない。彼の思想には教育の、幼児教育の、
原点がある。筆者のつたないちようちん持ちがかえってコメニ
ウスの偉大さをそこなったかもしれない。あらためて、彼の主

著の一つ『大教授学』の一読をおすすめしたい。

(大阪教育大学)

ヤン・アモス・コメニウスの生涯

一五九二年三月二十八日にモラヴィアの小都市ウンガリツシュ・
ブロード近郊のニヴニツに生まれる。父は彼が十歳のとき、母は
彼が十三歳のとき死す。十六歳、十七歳のときブレラウのラテン語
学校で学ぶ。その後、ヘルボルン大学(フランクフルト)、ハイデ
ルベルヒ大学等で哲学・神学を学ぶ。ブレラウの小学校教師、ラテ
ン語学校教師を経て、ボヘミア同胞教団教師となる。三十年戦争の
はじまった一六一八年に第一回の結婚をする。結婚は一六二四年戦
乱のためボヘミアの山中に避難した時とイギリス清教徒革命のあつ
た一六四九年にした。彼は生涯安住の地も安寧の家もなく諸国を亡
命して回った。それは一六二七年に故国を追われて以来、一六四八
年の三十年戦争後のウエストファリア条約により決定的となり、ポ
ーランドのリサをふり出しに、ロンドン、ストックホルム、ハンガ
リーのサロスバターク、リサ、ハンブルグ、アムステルダムをさま
よう。

このような生涯にもかかわらずコメニウスは偉大な教育学書をお
よそ二五〇点も残している。初期のものとしては、『現世の迷路と
魂の天国』、『安心の中心』、『母親学校指針』、『教授学』、
『語学入門』、『大教授学』、『光の道』等が有名である。後期の
ものとしては、一九三五年にハレの孤児院の記録保存所で発見さ
れた『人事改善に関する大会議』というシリーズが重要である。こ
れは第一巻汎覚醒、第二巻汎黎明、第三巻汎整合、第四巻汎教育、
第五巻汎言語研究、第六巻汎改革、第七巻汎勸告からなる。その他
に『最新言語教授法』、『世界図会』、『民族の幸福』、『遊戯学

校』などがある。そして教育思想のまとめとしての『教授学全集』もこの期のものである。『唯一の必要事』を書きおえて、一六七〇年十一月十五日アムステルダムにて波瀾にみちた人生をとじる。十一月二十三日ネールデンに埋葬さる。

参考文献(その一)

- ① 梅根 悟、コメニウス、牧書店、昭和三八年
- ② “ コメニウスにおける自然概念及び合自然原理、教育学術界連載、第六七卷三号、五号、六号、第六八卷一号、二号、三号
- ③ 鈴木秀勇、大教授学上、下訳、明治図書
- ④ “ コメニウス教授学の方法、一橋大学研究年報、社会学研究三、一九六〇
- ⑤ “ J、A、コメニウス「大教授学」の志向、一橋論双、第二九卷六号
- ⑥ “ Opera Didactica Omnia の新版その他について、一橋論双、第四三卷二号、五号
- ⑦ “ コメニオロギーの諸問題、一橋論双、第四四卷四号
- ⑧ “ ヤン・フスおよびヤン・アモス・コメンスキー研究の問題点、一橋論双、第五四卷三号
- ⑨ “ コメニウスの教授学的リアリズム、日本の教育史学第四集
- ⑩ “ コメニウスのおいたち、岩波講座現代教育学月報一
- ⑪ “ 古典をどう読むか(コメニウス)、教育、No.一五〇、十二月号
- ⑫ 江藤恭二、コメニウスの汎知学思想について、名大紀要第八卷
- ⑬ “ コメニウスの神学及び教育目的に関する思想を繞って、名大紀要第九卷
- ⑭ “ コメニウスの生涯の素描、九大紀要第六、七卷
- ⑮ “ 訳・アルト著、コメニウスの教育学、明治図書(その二は七月号巻末に掲載)

幼児の教育 第七十二卷 第六号

六月号 定価二二〇円

昭和四十八年五月二十五日印刷
昭和四十八年六月一日発行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村一ノ一一

印刷所 凸版印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所
所 フレーベル館にお願いいたします